平成２９年度 農作物病害虫発生予察情報
発生予報 第１号（５月予報）

平成29年４月28日　秋田県病害虫防除所

【内容】

Ⅰ．予報の要点
Ⅱ．主要病害虫の向こう１か月の予報
Ⅲ．発生予報と防除対策
Ⅳ．気象予報
Ⅴ．気象データ
Ⅵ．用語の説明

【問合せ先】

秋田県病害虫防除所　018-881-3660
秋田県農業試験場　018-881-3326
秋田県果樹試験場　0182-25-4224
かづの果樹センター　0186-25-3231
天王分場班　018-878-2251

【お知らせ】

◇今回の予報対象期間は５月を主とします。次回の発表予定は平成29年５月26日です。
◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。
http://www.pref.akita.lg.jp/bojo/
◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬があります。使用制限となる農薬の変更情報は秋田県のホームページで確認してください。http://www.pref.akita.lg.jp/suiden/
◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。http://www.famic.go.jp/
◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。http://www.e-komachi.jp/

水　稲	苗いもちの発生量は平年並と予想されます。育苗期いもち病防除は必ず行い、伝染源となる稲わらや籾殻は育苗施設やその近傍に置かないようにします。 苗立枯病の発生量は平年並と予想されます。育苗期間中は温度管理に注意し、土壌の湿度を適切に保つようにしてください。 イネミギワバエの発生量は少ないと予想されます。前年多発したほ場では育苗箱施用剤で防除してください。
小　麦	赤かび病の感染量はやや多いと予想されます。１回目の防除は開花始期に行い、２回目は１回目の防除から７～10日後に行ってください。
大　豆	タマナヤガの発生量は平年並と予想されます。本種は飛来性害虫であり、急激に発生量が増加することがあるため、今後の予察情報に注意してください。
果　樹	りんごでは腐らん病と黒星病が多いと予想されます。腐らん病は防除対策情報第１号を参照し、早期発見・早期対策に努めてください。黒星病は平成28年度農作物防除対策情報第８号を参照し防除対策を徹底してください。 なしでは黒星病がやや多いと予想されます。農作物病害虫発生予察情報注意報第１号を参照し、防除対策を徹底してください。

Ⅰ．予報の要点

Ⅱ．主要病害虫の向こう１か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水　稲	苗いもち	全県	－	－	平年並
	苗立枯病	全県	－	－	平年並
	（ピシウム菌）	全県	－	－	やや少ない
	（リゾープス菌）	全県	－	－	やや多い
	イネミズゾウムシ	全県	早い	－	やや少ない
	イネクビボソハムシ（イネドロオイムシ）	全県	やや早い	－	少ない
	イネミギワバエ（イネヒメハモグリバエ）	全県	やや早い	－	少ない
	フタオビコヤガ（イネアオムシ）	全県	－	－	少ない
	イネキモグリバエ（イネカラバエ）	全県	－	－	やや少ない
小　麦	赤かび病	全県	やや早い	－	やや多い
	うどんこ病	全県	－	－	やや多い
大　豆	タマナヤガ	全県	－		平年並
りんご	腐らん病	全県	－	多い	多い
	モニリア病	全県	やや早い	－	やや多い
	黒星病	全県	やや早い	－	多い
	ナミハダニ	全県	－	－	やや多い
	リンゴハダニ	全県	－	－	やや少ない
	ハマキムシ類	全県	早い	－	やや少ない
	果樹カメムシ類	全県	早い	－	平年並
な　し（日本なし）	黒星病	県北部・県中央部	やや早い	－	やや多い
	黒斑病	県北部・県中央部	やや早い	－	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	－	－	多い
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	－	－	やや少ない
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	早い	－	平年並
ぶどう	黒とう病	県南部	やや早い	－	平年並

水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合の注意

水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬がハウス内土壌に浸透しないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で散布してください。

詳細は平成29年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

Ⅲ．発生予報と防除対策

Ａ 水稲

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
１．苗いもち （苗の葉いもちを含む）	－	平年並（前年並）

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温は高いと予報されている（　/＋）。

イ、前年の穂いもちの発生量はやや少なかった（　/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、育苗施設やその近傍に稲わら、籾殻を置かない。

イ、育苗期間中に病斑が１個でも認められた場合は、同一育苗施設の苗は移植しない。

ウ、育苗期いもち防除は、次のいずれかの方法で必ず実施する。

①ベンレート水和剤500倍液を箱当たり500ml又は1,000倍液を箱当たり1,000ml、播種時～播種７日後頃にかん注する。

②ビームゾル500倍液を箱当たり500ml、緑化始期にかん注する。

エ、種子消毒にタフブロック又はエコホープＤＪを使用した場合は、上記ウ①のうち播種時処理を行わない。

オ、育苗期間～移植当日に施用する本田の葉いもちを対象とした防除薬剤には、箱施用剤、側条施用剤があり、防除効果の持続期間は７月中旬頃までである。

カ、近年、県内でＱｏＩ（ストロビルリン系）剤に対する耐性菌が広く確認されているため、本剤は使用しない。

キ、箱施用剤を使用する場合は、アプライ箱粒剤、デジタルコラトップアクタラ箱粒剤、ファーストオリゼ箱粒剤、ブイゲット箱粒剤、ルーチンフロアブル、ルーチン粒剤、Ｄｒ.オリゼ箱粒剤のいずれかを使用する。殺虫剤との混合剤を使用する場合は、薬剤によって使用時期が異なるため注意する。なお、箱当たり散布量は50ｇを厳守するが、ファーストオリゼ箱粒剤、ルーチン粒剤及びＤｒ．オリゼ箱粒剤（いずれもプリンス剤との混合剤を含む）は10ａ当たりの使用育苗箱数が20箱以上の場合は箱当たり散布量を25ｇとして使用することができる。

ク、側条施用剤を使用する場合は、ペースト肥料では側条オリゼメート顆粒水和剤（オリゼメート顆粒水和剤）又はツインターボ顆粒水和剤、粒状肥料ではコープガード剤で行う。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
２．苗立枯病	－	平年並（前年より多い）
（ピシウム菌）	－	やや少ない（前年並）
（リゾープス菌）	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温は高いと予報されている（ピシウム菌　/－、リゾープス菌　/＋）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、育苗期間中、低温時はできるだけ温度を確保し、土壌の湿度を適切に保つ（ピシウム菌）。

イ、出芽期間中は32℃以上の高温にしない。また、育苗期間中は高温に注意し、適切な温度管理を行う（リゾープス菌）。

ウ、床土にオラクル粉剤又はタチガレエースM粉剤を使用しなかった場合や播種時にオラクル顆粒水和剤、タチガレエースM液剤、ヘッド顆粒水和剤、ランマンフロアブルを使用しなかった場合は、発芽後、発病前にタチガレエースM液剤をかん注するか発芽後～緑化始期にランマンフロアブルをかん注する（ピシウム菌）。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
３．イネミズゾウムシ	早い（前年よりやや早い）	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温は高いと予報されている（－/＋）。

イ、前年の第１世代成虫の誘殺数は少なかったことから、越冬量は少ないと推定される（　/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、６月上旬に越冬後成虫が0.3頭/株（食害株率90％以上に相当）未満の発生量では収量に影響がないので防除の必要はない。

イ、前年６月の食害株率が90％以上に達していたほ場では、次のいずれかの方法で防除を行う。

①パディート箱粒剤、フェルテラ箱粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤などのいずれかを育苗箱に施用する。

②ダントツ水溶剤、バズ顆粒水和剤、ヘッド顆粒水和剤（播種時処理）などのいずれかを育苗箱にかん注する。

③コープガードW12、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤、ツインターボ顆粒水和剤のいずれかを移植時に施用する。

ウ、有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤又はプリンス剤に対する抵抗性のイネクビボソハムシ（イネドロオイムシ）が確認されている地域では薬剤の選択に注意する。

エ、移植前～移植時に殺虫剤を施用しない場合は、６月上旬に防除の要否を判断する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
４．イネクビボソハムシ（イネドロオイムシ）	やや早い（－）	少ない（前年並）

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（－/－）。

イ、前年の発生量が少なかったことから、越冬量は少ないと推定される（　/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、産卵盛期（６月上～中旬）に0.5卵塊/株以下の発生量では収量に影響がないので、これを超える卵塊密度の時に防除すればよい。

イ、イネミズゾウムシを対象として移植前～移植時に殺虫剤を施用したほ場では、本種の防除の必要はない。

ウ、有機リン系殺虫剤、カーバメート系殺虫剤又はプリンス剤に対する抵抗性が確認されている地域では薬剤の選択に注意し、次のいずれかの方法で防除を行う。

①パディート箱粒剤、フェルテラ箱粒剤、ワンリード箱粒剤08などのいずれかを育苗箱に施用する。

②ダントツ水溶剤、バズ顆粒水和剤、ヘッド顆粒水和剤（播種時処理）などのいずれかを育苗箱

にかん注する。
③コープガードW12、側条オリゼメートフェルテラ顆粒水和剤、ツインターボ顆粒水和剤のいずれかを移植時に施用する。
エ、移植前～移植時に殺虫剤を施用しない場合は、産卵盛期（６月上～中旬）に防除要否を判断する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
５．イネミギワバエ （イネヒメハモグリバエ）	やや早い（前年よりやや遅い）	少ない（前年よりやや少ない）

（１）予報の根拠
ア、３月４半旬～４月４半旬の平均気温はおおむね平年並に推移し、向こう１か月の気温は高いと予報されていることから、越冬世代成虫の発生時期は５月上旬と見込まれ（－/　）、水稲の移植時期と重ならないため産卵量は少なくなると予想される（　/－）。
イ、前年の発生量がやや少なかったことから、越冬量はやや少ないと推定される（　/－）。
（２）防除上注意すべき事項
ア、極端な早植えや遅植えを避ける。また、移植時の深植えや移植後の深水を避ける。
イ、前年多発したほ場では、スタウトパディート箱粒剤、ルーチンデュオ箱粒剤、ルーチンパンチ箱粒剤、パディート箱粒剤、ブイゲットグランドオンコル粒剤、ブイゲットフェルテラ粒剤、フェルテラ箱粒剤、ルーチンアドスピノ箱粒剤、ＢＡＳＦプリンス粒剤、Ｄｒ．オリゼフェルテラ粒剤のいずれかを育苗箱に施用する。または、ガードナーフロアブルを育苗箱にかん注する。
ウ、上記の育苗箱施用剤を使用しなかった場合は、移植後に産卵状況を確認し、発生が多いときは被害初期にエルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン粉剤ＤＬ、トレボン粒剤のいずれかを散布する。
エ、本種の被害は突発的に発生するため、今後の予察情報に注意する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
６．フタオビコヤガ（第１世代） （イネアオムシ）	－	少ない（前年並）

（１）予報の根拠
ア、向こう１か月の降水量は平年並か少ない、日照時間は平年並か多いと予報されている（　/－）。
イ、前年の第３世代の発生量が少なかったことから越冬量は少ないと推定される（　/－）。
（２）防除上注意すべき事項
ア、前年多発したほ場では、フェルテラ箱粒剤、プリンススピノ粒剤６、ルーチンアドスピノ箱粒剤などのいずれかを育苗箱に施用する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
7．イネキモグリバエ （イネカラバエ）	－	やや少ない（前年よりやや少ない）

（1）予報の根拠

ア、前年の発生量はやや少なかった（　/－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、前年多発したほ場では、以下の防除対策を実施する。

①イネ科雑草の茎の中で越冬するため、6月上旬までに畦畔の除草を行う。

②グランドオンコル粒剤を移植当日に育苗箱に施用する。

B 小麦

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
1．赤かび病	やや早い（－）	やや多い（前年並）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（－/±）。

イ、秋田地域振興局農林部の定点調査によると、4月17日現在の小麦の葉数は10.8葉（平年差＋0.4葉、ネバリゴシ）、10.4葉（過去4か年平均差－0.2葉、銀河のちから）であった（±/　）。

ウ、前年収穫期の発生量はやや多かった（　/＋）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、多肥栽培を避ける。

イ、1回目の防除は開花始期にシルバキュアフロアブル又はストロビーフロアブルを散布し、2回目は1回目の防除から7～10日後にトップジンM粉剤ＤＬ、トップジンM水和剤、イオウフロアブル、石灰硫黄合剤のいずれかを散布する。

ウ、開花始期に1回目の散布ができないと予想される場合は早めに散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2．うどんこ病	－	やや多い（前年よりやや多い）

（1）予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（　/＋）。

イ、前年乳熟期の発生量は平年並であった（　/±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、本病は厚播、多肥、過繁茂のほ場で発生しやすいため、適切な肥培管理に努める。

イ、ストロビーフロアブル、トップジンM水和剤、イオウフロアブル、石灰硫黄合剤のいずれかを発生初期から2～3回散布する。

ウ、耐性菌出現回避のため、同系統の薬剤の連用を避ける。

C 大豆

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1．タマナヤガ	－	平年並（前年よりやや多い）

1）予報の根拠

ア、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける４月４半旬までの総誘殺数は18頭（平年15.9頭）で平年並であった（　/±）。

2）防除上注意すべき事項

ア、成虫はタデ、アカザなどの広葉雑草に産卵するので、播種前にほ場内やほ場周辺の雑草処理を行う。

D りんご

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1．腐らん病	－	多い（－）

（1）予報の根拠

ア、４月中旬の巡回調査における発病樹率は6.3%（平年1.8%）、発病地点率は36.4%（平年23.0%）でいずれも高かった（　/＋）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、４月28日発表の防除対策情報第１号を参照する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2．モニリア病（実ぐされ）	やや早い（－）	やや多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア、向こう１か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（　/±）。

イ、果樹試験場のふじの展葉日は４月16日で平年より３日早かった(－/　)。

ウ、横手市アメダスデータでは、ふじの発芽日（本年は４月６日）から４月25日までの間、降水量が１日あたり10ミリ以上の日数は３日（平年1.7日）でやや多かったことから、葉ぐされの感染量はやや多いと推定される（　/＋）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、葉（花）ぐされ、実ぐされは見つけ次第摘み取って焼却するか土中に埋める。ひこばえは剪去する。

イ、葉ぐされの発生状況に応じて、次により防除を行う。

①展葉期に発生が多い場合は、速やかにトップジンM水和剤 1,000倍に展着剤ニーズ 1,000倍を加用し散布する。

②開花直前に葉ぐされの発生が見られた場合は、速やかにアンビルフロアブル 1,000倍、インダーフロアブル 5,000倍、オンリーワンフロアブル 2,000倍、サンリット水和剤 3,000倍のいずれかを散布する。

③多発園及びその周辺では実ぐされ防止のため、中心花満開期にトップジンM水和剤 2,000倍を散布する。さらに、株ぐされ防止のため、落花直後にアンビルフロアブル 1,000倍又はスコア

顆粒水和剤 3,000倍を散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
３．黒星病	やや早い（－）	多い（前年並）

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の降水量は平年並か少ないと予報されている（　/±）。

イ、果樹試験場のふじの展葉日は４月16日で平年より３日早かった(－/　)。

ウ、前年の発生量は多かった（　/＋）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、開花期以降の防除については、３月24日発表の平成28年度農作物病害虫防除対策情報第８号を参照する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
４．ナミハダニ	－	やや多い（前年より多い）

（１）予報の根拠

ア、前年秋期の発生地点率は平年並であったが、一部の園地では発生量が多く、１葉当たりの発生頭数は多かった（　/＋）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、徒長枝の剪去、焼却処分を開花中及び落花20日後頃の２回行い、発生密度の低下に努める。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
５．リンゴハダニ	－	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

ア、３月上～中旬の巡回調査における越冬卵の寄生短果枝率は0％（平年8.6％）でやや低かった（　/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、発生が多い場合は、落花直後にバロックフロアブル 2,000倍を散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
６．ハマキムシ類	早い（－）	やや少ない（前年並）

（１）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温は高いと予報されている（－/　）。

イ、果樹試験場のふじの展葉日は４月16日で平年より３日早かった(－/　)。

ウ、前年の発生量はやや少なかった（　/－）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、開花直前又は落花直後にＩＧＲ剤、ＢＴ剤、ジアミド系剤（エクシレルＳＥを除く）のいずれかを散布する。特に、ミダレカクモンハマキが多く開花期間中に被害(巻葉)が目立つ園地では、落花直後の散布を必ず実施する。また、訪花昆虫保護のため、開花１週間前～落花直後やミツバ

チ設置期間は上記以外の殺虫剤は散布しない。
イ、マッチ乳剤は、サビ果発生のおそれがあるので、落花10日後から６月下旬まで散布しない。
ウ、交信かく乱剤は、ハマキムシ類成虫発生前の５月末までに設置する。使用する面積が広くまとまるほど効果的で（最低20ａ）、風通しの良い狭い園地や急傾斜地では効果が劣る。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
７．果樹カメムシ類	早い（－）	平年並（前年並）

（１）予報の根拠
ア、向こう１か月の気温は高いと予報されている（－/　）。
イ、前年秋期の越冬トラップ調査におけるクサギカメムシの越冬地点率は80.0％（平年74.6％）、越冬数は6.7頭/地点（平年6.5頭/地点）でいずれも平年並であった（　/±）。
（２）防除上注意すべき事項
ア、園内へのカメムシ類の飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。
イ、飛来数が多い場合は、アクタラ顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、ダントツ水溶剤、ＭＲ．ジョーカー水和剤のいずれかを2,000倍で散布する。
ウ、殺虫剤の散布はミツバチの撤去後とする。

Ｅ　なし（日本なし）

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
１．黒星病	やや早い（前年並）	やや多い（前年並）

（１）予報の根拠
ア、向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（－/－）。
イ、果樹試験場天王分場における幸水の発芽日は、４月９日（平年４月10日）で平年並であった（±/　）。
ウ、前年９月の巡回調査における発病葉率は高かった（　/＋）。
（２）防除上注意すべき事項
ア、４月19日発表の注意報第１号を参照する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
２．黒斑病	やや早い（前年よりやや早い）	平年並（前年より少ない）

（１）予報の根拠
ア、向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（±/±）。
イ、果樹試験場天王分場における幸水の発芽日は、４月９日（平年４月10日）で平年並であった（±/　）。
（２）防除上注意すべき事項
ア、枝病斑、枯死芽及び不要な徒長枝は剪去し、焼却する。
イ、落花期から被袋までが果実感染防止の重点時期であるので、袋かけ作業は遅れないようにする。
ウ、落花直後から７～10日ごとに薬剤を散布する。

エ、発病の多い品種は南水、八雲である。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3．ナミハダニ	－	多い（前年より多い）

（1）予報の根拠

ア、前年９月の巡回調査において、１葉当たりの発生頭数は多かった（　/＋）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、不要な徒長枝は剪去し、焼却する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
4．リンゴハダニ	－	やや少ない（前年よりやや少ない）

（1）予報の根拠

ア、３月の巡回調査における越冬卵の寄生枝率及び発生地点率はいずれもやや低かった（　/－）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、発生園では落花以降にバロックフロアブル 2,000倍を散布する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
5．果樹カメムシ類	早い（－）	平年並（前年より少ない）

（1）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温は高いと予報されている（－/　）。

イ、果樹試験場天王分場における幸水の発芽日は、４月９日（平年４月10日）で平年並であった（±/　）。

ウ、前年秋期の越冬トラップ調査におけるクサギカメムシの越冬数は6.7頭/地点（平年6.5頭/地点）、越冬地点率は80.0％（平年74.6％）でいずれも平年並であった（　/±）。

（2）防除上注意すべき事項

ア、園内へのカメムシ類の飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。山間部の園地では特に注意する。

イ、飛来数が多い場合は、エルサン水和剤40 800倍又はスミチオン水和剤40 800倍を散布する。ただし、スミチオン水和剤40は展葉直後の柔らかい葉で薬害を生じるおそれがあるので注意する。

ウ、殺虫剤の散布はミツバチの撤去後とする。

F ぶどう

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1．黒とう病	やや早い（－）	平年並（前年並）

（1）予報の根拠

ア、向こう１か月の気温は高い、降水量は平年並か少ないと予報されている（－/±）。

イ、ぶどうの初期生育は早いと見込まれる（－/　）。

ウ、前年７月の巡回調査における発病果穂率及び発病葉率は、キャンベル・アーリー及び巨峰いずれも平年並であった（　/±）。

（２）防除上注意すべき事項

ア、欧州系品種やスチューベンは特に感染しやすいので注意する。

イ、伝染源となる前年の被害枝（結果母枝）や巻きひげは、切り取って処分する。

ウ、新梢長５～10cm頃にオーソサイド水和剤80 800倍、新梢長15～20cm頃にデランフロアブル1,000倍を散布する。ただし、デランフロアブルは展葉数２～３枚時に散布すると薬害を生じるおそれがあるので注意する。

エ、発生が多い園では、５月中～下旬にインダーフロアブル 8,000倍又はマネージＤＦ 6,000倍を散布する。

Ⅳ．気象予報

平成29年４月27日仙台管区気象台発表　東北地方１か月予報（４月29日～５月28日）

（１）予想される向こう１か月の天候

向こう１か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう１か月の平均気温は、高い確率50％です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40％です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40％です。

週別の気温は、１週目は、高い確率60％です。２週目は、平年並または高い確率ともに40％です。３～４週目は、平年並または高い確率ともに40％です。

（２）向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率

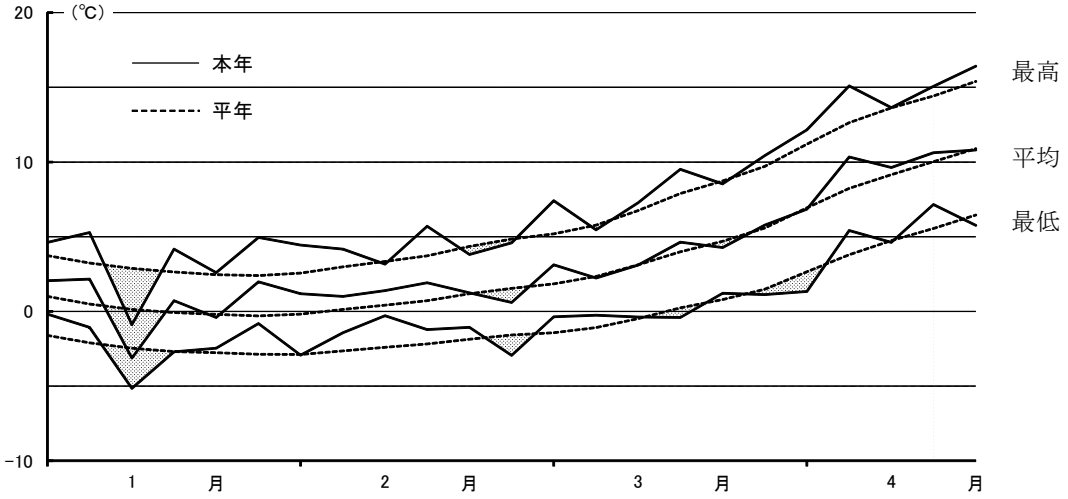
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気　温	20％	30％	50％
降水量	40％	40％	20％
日照時間	20％	40％	40％

（３）気温経過の各階級の確率

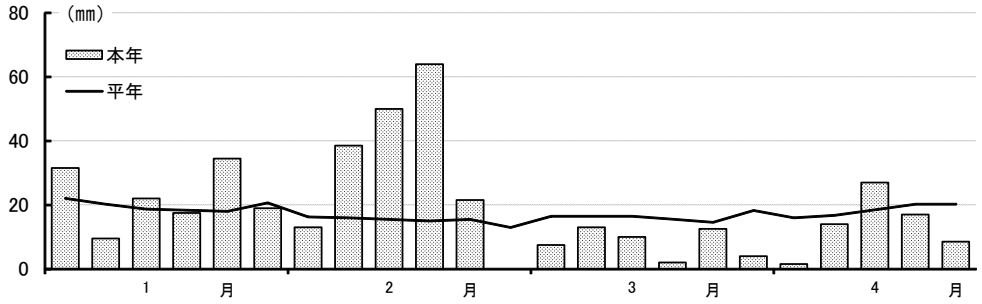
	低い	平年並	高い
4/29～5/5	10％	30％	60％
5/6～5/12	20％	40％	40％
5/13～5/28	20％	40％	40％

Ⅴ．気象データ（秋田市、１月１半旬～４月５半旬）

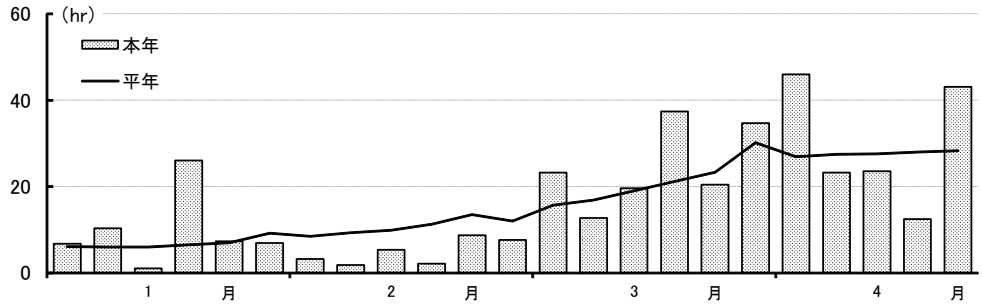
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



Ⅵ．用語の説明

発生時期

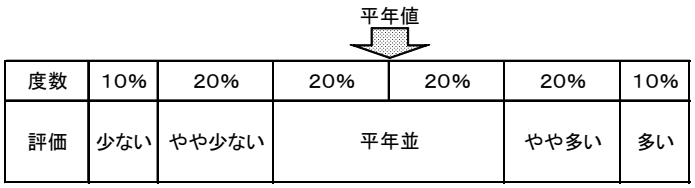
平年の発生月日からの差を５段階評価で予測します。

日数	～ −6	−5	−4	−3	−2	−1	平年発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6 ～
評価	早い	やや早い			平年並					やや遅い			遅い

発生量

発生密度の平年値からの差を５段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少な

い」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感じることがあります。



度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（　/　）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「＋」、「早い」場合は「－」となります。発生量が「多い」場合は「＋」、「少ない」場合は「－」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50％以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50％以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20％で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40％の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40％で低い（少ない）が20％の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30～40％の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率（低い（少ない）：平年並：高い（多い））	解　説
高い（多い）確率が50％以上	高い（多い）
（20：40：40）	平年並か高い（多い）
平年並の確率が50％以上	平年並
（40：30：30）（30：40：30）（30：30：40）	ほぼ平年並
（40：40：20）	平年並か低い（少ない）
低い（少ない）確率が50％以上	低い（少ない）

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月１日から５日ごとに区切った期間となります。１半旬は１日から５日まで、２半旬は６日から10日までであり、以降６半旬まで５日ごとに該当する期間を指します。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

・農薬の使用基準を遵守する。
・病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
・家畜・養蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の家畜及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。